2020年 1月 29日

博士学位審査　論文審査報告書（課程外）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　内藤　順子
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　開発支援の実践をめぐる文化人類学的研究
—専門知のリハビリテーションへむけて—
論文題目（英文）　An Anthropology of Realities of Development: Towards a “Rehabilitation” of Professional Knowledge

公開審査会
実施年月日・時間　2019年12月16日・15:00-17:50
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　201教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・准教授	竹中　宏子	Ph.D.（社会人類学）	マドリッド大学(UCM)	文化人類学
副査	早稲田大学・教授	井上　真	農学博士	東京大学	環境社会学
副査	早稲田大学・名誉教授	蔵持　不三也	博士（人間科学）	早稲田大学	文化人類学
副査	九州大学・名誉教授	関　一敏	修士（文学）	東京大学	宗教人類学

論文審査委員会は、内藤順子氏による博士学位論文「開発支援の実践をめぐる文化人類学的研究—専門知のリハビリテーションへむけて—」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について45分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　開発現場で実際に専門家らはどのように異なるハビトゥスを身に着け、あるいはそのきっかけを持ち得るのか。これに対し明確な単一の回答は出せないものの、申請者としては「時間をかけて」「成果主義のみに陥ることなく」「結果に到達するまでの過程を見、寄り添うこと」、つまり、流動的な対象と終わりなき営みとして付き合う民族誌の方法そのものが重要である点が指摘された。

1.2　文化人類学者が開発支援でのファシリテーターだとしているが、地域活動では世話人と呼ばれるようなキーマンの存在が認められる。申請者からは地域のキーマンの存在は認識しているものの、未だうまく論を展開しきれていない反省点と修

正案が示された。

1.3　「貧困のハビトゥス」と「貧困の文化」の違いに関する説明が求められた。貧困の文化は貧困状態を静態的で変化のないもので、現場から捉えられる現実とは異なるが、一方、貧困のハビトゥスという概念は現実を動態的かつ流動的で可変的なものと扱うことができ、未来を描くことも可能であり、実態に即した概念に近いと説明があった。

1.4　リハビリテーションの語源が中世の教会に遡るという点に、疑問が呈された。申請者からは文献を挙げ、リハビリ業界においてはごく一般的な共有知識として流布している認識であるとの回答があった。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1ハビトゥス（P.ブルデュー）の構造的な側面が考慮されていないのではないかという指摘。

2.1.2開発支援の現場において文化人類学者が異なる人々を繋げるファシリテーターとなりえるという指摘があったが、その前に地域を導いていくような存在を看過している感があり、論理が飛躍している。同様に「専門知のハビトゥス」についても、文化人類学の役割を過大評価していないか。

2.1.3本論文でファシリテーターとなり得る人類学者は、どのような場合あるいは文脈でのことを指すのか、限定しないとわかりにくい。

2.1.4せっかく長期の現地調査を行ったのだから、図や画像などを入れて欲しい。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1修正前にあげていたハビトゥス概念について、より社会的構造について考慮・加筆し、事例もそれに即して修正要求に応えた。

2.2.2地域を導く存在については、CBRに関していえば既に民族誌の中に登場する人物を新たに地域のファシリテーターとして描くよう修正した。一方、ファシリテーターと人類学者に関する指摘については今後の課題とし、方向性と見通しを注記することで修正に応えた。

2.2.3本論文で扱う「人類学者が置かれた文脈」について、「開発現場の人類学」および「開発現場で人類学」という章立てはこの限定を意識していたものの明記していなかったため、あらためて限定された状況について説明を加えた。

2.2.4フィールドの画像を10枚追加した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、「貧困」「障害」「それをとりまく外部（開発支援者＝専門家）」の相互関係を文化人類学的なエスノグラフィーを通じて考察し、従来の 3 者関係のあり方を再考しながら、共生の道を探究することを目的としている。そこでは特に支援のあり方を理論的に議論し、実践的な提案を試みている。研究目的は明確であり、妥当なものだと考える。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：通算約 6 年にわた

る（その内3年6か月ほどはJICA派遣専門家として活動）、チリの首都サンチャゴに住む貧困者・障害者あるいは社会的弱者の、特にリハビリテーションの現場とそのあり方に注視しながら、文化人類学的フィールドワークを基にしたエスノグラフィーを主たる方法に据え、貧困の文化（O.ルイス）、ハビトゥス（P.ブルデュー）、環世界（J.ユクスキュル）の理論を援用しながら研究が進められている。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：「貧困＝悪」という固定観念から解放されたサンチャゴの貧困の実態をエスノグラフィーを通じて明らかにした。また、貧困状態にある障害者をめぐり、あくまでも現場から立ち上げ、専門家が「文脈から自由になること」を通じて行う「支援」を一つの結果として提示している。異なる専門家間の共約の可能性と、そうした異文化間のファシリテーターとしての文化人類学の役割も考察されている。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1貧困に関して、O.ルイスの貧困の文化研究を超えて、「貧困のハビトゥス」が構築される過程を微細なエスノグラフィーを介して分析し、生物学の概念である「環世界」も援用しながら、貧困の本質を明らかにしている点が独創的で高く評価できる。

3.4.2貧困状態にある障害者のリハビリテーションの問題を、開発（人類学）における権力の問題や、医療（人類学）における近代医療批判にとどまらず、異なる次元での異文化間理解の問題と捉え、丹念なエスノグラフィーを通して価値を異にする人々の間で齟齬が起こる状況を分析している点が新しい。そこから生活世界を視野に入れたリハビリテーションシステムを構築・実践した点は社会貢献としても評価できる。

3.4.3本論文では支援者の優位性に関する批判と自省の研究を超えた新規的なエスノグラフィーを提示している。こうして当たり前すぎて疑えない日常に潜む構造を発見できる。弱者の視点に立った開発支援を考えるうえで、エスノグラフィーという方法論の有効性も示唆していると言える。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1「貧困」や「（開発）支援」をテーマに、従来の開発人類学、医療人類学あるいは都市人類学と関連性をもちながらも、新しい「貧困の人類学」を提唱した点で学術的意義は大きい。また、貧困を研究することは、貧困の再生産を可能な限り減少させる手段を探究することを意味し、貧困の人類学には社会的意義がある。

3.5.2日本における人類学の「貧困」概念について、人類学が貧困研究や開発の領野に参入するようになった時代背景と様ざまな前提から見直しを図った点はこれまでなかったものであり、意義深い。

3.5.3人類学にとどまらず、隣接分野（臨床心理学、社会学、リハビリテーション医学…）の知見も援用しながら貧困状態にある障害者、すなわち「社会的弱

者」の問題を扱う試みが意義深い。複合的な視点から、「社会的弱者」に関して他分野でも応用可能な研究の視点を提示している。

3.5.4専門知を持って支援の現場に携わる人々の「感情」や当たり前がくつがえされる「気づき」も分析範囲に含めた点は、開発支援の場で今後さらに必要な見方である。

3.5.5文化人類学の特徴である、人や対象と生身で向き合うことの可能性をあらためて本論文は示している。

3.5.6本論文で強調される「経過主義」は、文化人類学が他の領域で活動する場合に核となりうる。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1本論文で扱うリハビリテーション現場の事例は、医療と地域社会の問題とも読み替えることもでき、人間科学でよく扱われるテーマと重なる。特に医療技術者のような専門家の専門知を微細に分析し、弱点を提示し、社会へ開くための気づきを提示している点は、人間科学の実践性に貢献していると言える。

3.6.2貧困の問題、特に貧困者への開発支援の問題はWell-being探究の試みでもあり、本論文の成果自体がWell-beingを目指す人間科学に大きく貢献するものと考える。

3.7　不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・ 内藤順子　2004 貧困をひらく：スラム住民の暮らしと貧困克服計画をめぐって，九州人類学会報 31号，56-62.

・ 内藤順子　2008，＜下から＞の人類学的開発援助：チリにおける地域リハビリテーションの実践から,国際開発研究 17巻2号，77-91.

・ 内藤順子　2009，ストリートに育まれる身体：チリ・サンチャゴ市の「貧困空間」から，国立民族学博物館調査報告SER 81号上巻、245-270.

・ 内藤順子　2011，チリ開発プロジェクトでの偶然の出会い，支援のフィールドワーク：開発・福祉の現場から（世界思想社），104-112.

・ 内藤順子　2015，スラム観光をめぐる感情的葛藤のフィールドノート，関根久雄編著，実践と感情：開発人類学の新展開(春風社)，195-218.

5　学識確認：関連科目については、「大学院人間科学研究科博士学位論文（課程外）審査に関する内規」第１７条第２項第三号を満たすことを確認した。また、外国語については、同内規第１８条第４項第三号を満たすことを確認した。

6　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上